

重信幸彦著

## 『〈お話〉と家庭の近代』

野村典彦

まず、本書の視野の取り方を、柳田國男著

月／坪内逍遙)、(24)『日本新童謡集』(8月／北原白秋)、(30)『アンデルセン童話集』(7月／鈴木三重吉)あたりが早い。(64)『歌・俳句・諺』(昭5／折口信夫・高濱虚子・柳田)も

見落とせないが、(5)『子供の実験室』(昭3／石原純)など科学分野の著作も少なくはない。

「お伽話」や「童話」と並列される「昔話」。い。「お伽話」や「童話」と並列される「昔話」。全体を包み込む「児童」。

例えば、『日本神話伝説集』の二〇五頁、京助(アイヌ篇)、田中梅吉(朝鮮篇)、伊波普猷(琉球篇)、佐山融吉(台湾篇)。(13)『支那童話集』(昭4)は佐藤春夫の執筆、「はしがき」には「ほんとうなら芥川龍之介君と一緒にすつもりでゐました」とある。本棚

牛の鼻取りの挿絵。「今ではそれを用ひる農家が、東北の方でも、だんく少くなりましたが」と前頁にあるが、平成10年に千葉県内を歩いても「鼻出し」の記憶は話題になる。アルスの書物を手にできる読者層、田うないには(1)『日本歴史物語(上)』(昭3／喜田貞吉)から並べられるが、奥付を見ると昭和2年の『日本お伽噺集』(7月／巖谷小波)、(15)『日本童話集(上)』(8月／島崎藤村)、(16)『』、「昔話」「伝説」研究では捉えられない「家庭」という場における「お話」の近代を明らかに著すつもりでゐました」とある。この柳田の著述はなされていたということだ。

(中)【(5月／小川未明)、(22)『児童劇集』(5月／坪内逍遙)、(24)『日本新童謡集』(8月／北原白秋)、(30)『アンデルセン童話集』(7月／鈴木三重吉)あたりが早い。(64)『歌・俳句・諺』(昭5／折口信夫・高濱虚子・柳田)も見落とせないが、(5)『子供の実験室』(昭3／石原純)など科学分野の著作も少なくはない。「お伽話」や「童話」と並列される「昔話」。全体を包み込む「児童」。

これまで検討してきた石井の著作群は、手堅い文献学的研究から掘り進めて、過去においても現在においても時代状況と対応しながら活動している口承の世界に迫るために拠点を準備してくれているといえるだろう。石井が今後の課題として展望しているのは「資料の活用」という問題であるが(六頁)、これを地元の人々の活動と連動させていくためにはどうすればよいのだろうか。口承文芸の継承という課題が、遠野における石井の研究から投げ掛けられているのである。

(柳田國男と遠野物語)三弥井書店、二〇〇三年、二五〇〇円。

『遠野物語辞典』岩田書院、一〇〇三年、七九〇〇円。

『昔話の伝承と資料に関する総合的研究』自刊、二〇〇三年三月、非売品

(かわもり・ひろし／甲子園大学)

かにしようという刺激作が、重信幸彦著『〈お話〉と家庭の近代』である。



では本書の章立て。

序章 ある〈お話〉の記憶から／I 「家庭」  
という夢 明治後期、二つの『家庭雑誌』／  
II お伽噺と「家庭」 嶽谷小波の家庭論／III  
「児童」という近代 科学・学校そして「賢母」  
／IV 「家庭」の時代へ モダン都市の文化の  
なかで／V 「家庭」という銃後 総力戦の時  
代に／終章 ふたたび、ある〈お話〉の記憶  
から／

自らの経験を想起しながら、〈お話〉の扱いを説明する記述が序章にある。

ここで〈〉をつけて、使っている〈お話〉という概念は、口承文芸でもなく、近代文学や児童文学でもない、声や文字を介して、ひとまとまりの意味ある物言いである

ハナシとして場に生起する言葉のありようを、ゆるやかにとらえるために使っています。そのとき、口承文芸という枠組みからも文學といふ枠組みからもこぼれ落ちて行く経験を対象化できるのではないかと考えています。

重信が参照するのは、例えば「杜子春」を

繰り返し父親から〈お話〉として聞いた経験である。サラリーマン家庭で行なわれた口と耳のいとなみ、と言つてしまふと、うつかり通り過ぎてしまう「家庭」に立ち止まることによって、「イエ」を扱つてきた民俗学や口承文芸研究の及ばなかつた言葉のありようを対象化すると同時に、口承文芸研究の柱の一つかである「昔話」研究が、柳田國男によつて塑像され始める当時の磁場を明らかにする。

目次に従つて要旨をたどつておく。

◇

I 「家庭」という夢

明治20年代に、英語「ホーム」の訳語として出現した「家庭」は、雑誌メディアのなかで形を与えられる。そこでは家族の情緒的な関わりと女性の役割的重要性が唱えられた。

民友社(徳富蘆峰)の『家庭叢書』第一巻『家庭乃和樂』(明27)は、「家庭」の理想に至る

最後の要素に「遊楽」を挙げる。そこに金のかからない「遊樂」として、食後に家族で談話会・茶話会をすすめる記述がある。

互いに愛情と懇切を以つて一日の労を慰め互いに昼間見聞したる珍奇を談笑し、或は教訓となるべき昔話を語り、或は新聞雑誌の淡泊にして面白き節々を読み、或は

嬰兒の可憐なる顔を眺めて打ち笑い、或は小児少女が学校にて学び得たる學問の事や修身談などを物語る無邪気の口調を聴けば、一日の勤労を忘れ一家忽ち和氣藹然たる樂園たらしむべし。

「家庭」という〈お話〉の場には「国民」を創り上げる役割が重ねられていた。「家庭」を管理する女性は、新聞など近代的なメディアが形成する世間から、史談、文芸、科学を供給しつつ、演劇・寄席、猥褻な談話は排除する役割を期待されていたのだ。

明治36年創刊、由分社(堺利彦)の『家庭雑誌』になると、「家庭」の実践を紹介する記事が多くなる。それは間取り、食卓の近代化と歩を合わせて〈お話〉も重要な要素として

ながら、「団欒」が「家庭」という近代を形成していく過程を映している。

II お伽噺と「家庭」

同時に、「お伽噺」という言葉が、子どものために〈お話〉として定着する。明治20年代に嶽谷小波がこの言葉を選び取った時に構想した意味とはズレてしまつてゐるのだが、父親の權威が相対的に低下し母親が怖いもののように思われてきた社会の変化は、小波の立場からも前向きに評価できるものだつた。

「家庭」の理念は食卓の様子も変化させた。

箱膳（鉢々膳）から共同膳への推移は食事中の会話の禁止から「団欒」への推移と重なる。

### III 「児童」という近代

一方、明治30年代には児童研究という科学が「家庭」に介入してゆく。子どもを「原始」「野蛮」「自然」に近いものとする、それはまさに近代的なものだった。そこでは子どもが「知力」「道徳」を形成する時期として学校に上がるまでの「家庭教育」が問題にされる。

特に、家庭経営の役割を担う女性・母には知識や品性、そして教育技術の修養、すなわち、近代的「良妻賢母」が求められている。ここでも直接的な世間とは隔離され、活字メディアによって「家庭」にもたらされる〈お話〉の効果が科学的な見地から説かれる。

### IV 「家庭」の時代へ

明治20年代に流入したヘルバルト教育学は、「童話」教材を重視した。児童の精神の成長段階に合わせて教材を選択してゆく。この理論の延長線上に展開する児童研究と、小波以来の「お伽噺」の合流したあたりに、高木敏雄や松村武雄の童話論など、大正から昭和初期の童話研究が一つの達成を迎える。

この時期は都市中間層の出現した時期であ

る。居を郊外に構えたサラリーマンの日常生活

活こそ、「家庭」の実践の場だった。それは百貨店や雑誌、書籍といった、子どもを巻き込んだ大衆文化の中にあり、まさに

近代的なメディアが直接「家庭」に流入していく。大正7年創刊の鈴木三重吉主宰『赤い鳥』は、そんな大衆文化的児童向け読み物を批判した。そしてラジオの出現。身体を介さずには声が「家庭」に運びこまれる。それまでは外部にあつたさまざまな芸が「家庭」に流れ込むとともに、口演童話も放送された。

柳田國男が「昔話」という語を用い、ある

いは「昔の国語教育」と言つたのは、こうし

た「お伽噺」「童話」の否定だった。翻訳や創作を区別してゆくのは勿論、子どものためになるという理念から離れようとした。「話法」の差異として柳田は「童話」をみる。子どもに話をさせることの害を説く。これはまさに学校教育と家庭教育とに対する批判である。同時に、理念の先行した「家庭」「団欒」がそれまでの暮らしを均質化させていくこと

### △

本書の意欲的な入射角の意義を読み取れない読者があるとするとならば、それはおそらく、近代的な学問として形成されようとする時期の口承文芸研究を読み替えるながら、今日に至る方向性に限定されてきた端緒に触れる重信の歩幅に原因があると思われる。具体的に言ふなら、一〇三頁。

柳田は、童話に対しても「口承文芸」や「昔話」という概念を対置させたとき、その童話が体系化されてゆくながで、柳田が「昔話」という言葉を立てて向かい合つて立った「家庭」で逆説的にいえば、そうすることで柳田は、

囲炉裏端のみが特別視された。

### V 「家庭」という鉢後

「家庭」と「団欒」は戦争によつて失われる。しかし、父親が出征した後、母親は子どもを教育しながら、国家を支えた。男性の果たしていった社会的役割も女性に任されるようになり、鉢後の主役となる。「お話」の中身はさまざまな美談だったが、そこにも「家庭」は根底にイメージされていた。次代の国民である子どもを育む、母親を中心とする国家の礎、それは明治20年代以来つくりあげてきた「家庭」の理念でもあった。

「家庭」という近代を問うていたのです。

しかし柳田自身が、話法＝場という問いの上に描き出した□承文芸研究の筋道が、どちらかというと、「日本」の固有性を明らかにする志向を宿していたことも確かでした。それは後の民俗学が、しばしば「日本」を語る役割を期待されるようになることとも無縁ではありません。

「しかし」と、重信が一步で渡つてしまふ段落の間に、周辺のさまざまな研究を睨みながら、民間伝承についての学問を体系化してゆく柳田の姿があるはずだが、本書ではそちらにはあまり踏み込まない。けれども、柳田以後こうした場という問いの可能性は、もっぱら「日本」の不变の固有性に向かう筋道に位置づけられ、その可能性を狭めています。

という一〇四頁の一文が、兵藤裕己（「□承文学総論」）〔岩波講座日本文学史第16巻 □承文学」〕平成9年／岩波書店）、『声』の国民国家・日本」（平成12年／日本放送出版協会）による□承文芸研究への問い合わせるものであるのは確かだ。近代の街角に浪花節の「声」を聞こうとする兵藤、近代の家庭に「お話」の声を聞こうとする重信。「柳田

以後」対象とされなくなるふたつの声は、ラジオの出現によって「団樂」の場の問題としても重なってくるはずである。ただし、兵藤の書名にあるような「国民國家」という言葉を重信は本書で一度も使わない。早よりを避けながら、□承文芸研究を相対化するための、さらにいくつかの補助線を引いてゆく用意があるとした。「後の民俗学」との接続があつたり済まされている部分は、V章で触れられている「銃後」の問題も含め、今後の精緻な論稿の位置を予告しているのだろう。

そもそも、「あとがき」に「団樂研究のとば□に立つことが出来ました」とあるとおり、本書はあくまでも刺激的な「とば□」とされている。なので、疑問をいくつか。

何の説明もなく、しかしそれは間違いなく選ばれた戦略であるはずだが、本書では「書き書き」という手法が全く用いられない。文献資料以外に、唯一紹介されているのは序章、父親から「お話」を聞いた自身の体験である。だが、本書を貫く芯は、「家庭」の管理者としての役割を果たす母親の存在だろう。近代における母親の発見は、産育から教育へ至る道筋において一生面を開いてい

葉も思い出しておきたい。近世末、明治、戦後。科学と出会つてきたのは教育だけではない。生活の経験に裏打ちされた各々の知とその時々の科学の知とがせめぎ合う波打ち際に、「お話」の場としての「家庭」が形成されようとしたのではないか。サラリーマンにさり済まされている部分は、V章で触れられることも、もちろん父親の姿も無視はできないが、それ以前に母親の姿を追う必要がある。「書き書き」の意味には厳しく自覚的な重信であるから、安易に聞き取り資料の列举はできないのであろうが、良妻賢母を学び、良妻賢母を生きてきた生の声の裏づけが必要だろう。ちなみに、私の祖母は福井の市街地の出身で、女学校を卒業している。箱膳も記憶する明治生まれの彼女は、食卓で「乃木大将の母」の話をすることがある。食べ物の好き嫌いを最近は厳しく叱らなくなつたという文脈において、食べるまで同じ物を出し続けた「乃木大将の母」の厳しさが話題になる。なお、私は祖母から「ボイドコセ」（大正3年6月A）や「茶栗柿懸」（同3年1月）、「八十のモークモク」（同4年3月）などを風呂に入りながら聞いていた。東京の東部で「家庭」を管理してきた「お母さん」が、「お婆ちゃん」として幼い私

を迎えてくれた新しい家には、立て替えた前には無かつた「お風呂場」があった。

もう一点。フィールドワークに親しんだ立

場からは実践面の疑問を指摘されよう。確かに、書籍や雑誌に残された家庭教育論の文

章はを目指された「家庭」「団欒」の像を窺わ

せ、新中間層がそれを実現する様子を記録す

る。けれども「後に民俗学で『昔話』や『伝

説』と分類されるような「お話」を含めて、「団欒」の実践に踏み込む必要がある。「団欒」の〈声〉はどのようなものだったのか。阪急

沿線の言葉と東急沿線の言葉は無論のこと

同じではない。「演劇」「寄席」が望ましくない話題とされることは、現実にはこ

れらが好まれていた可能性が高い。この時期

の大衆文化を文献資料からたどると、「郊外」や「新中間層」の語感が示すように、東京で言えば西部の地域と直結して連想されがちだが、そこからは、東京東部の生活者が抱えていた三越や白木屋に対する不思議な地元意識が抜け落ちてしまう。重信の引用する羽仁説の文章には、親が両手を使って影絵をしてみせた描写があるが、こうした経験は三十年前に亡くなつた祖父が上演してくれた「団欒」をして私にもかすかに記憶がある。ならば、

「馬牛卵野菜が錢湯に行つて」とか「キュー・クツ」とか、日本橋生まれの祖父が（やはり）風呂で聞かせてくれたお話をについても「団欒」の視点が解き明かしてくれそうな期待が膨らんでくる。「話種」「話型」という視点ではなく、〈お話〉の場のあり様からの究明は、こうした際にも成果を見せてくれるはずだ。

最後に、団炉裏端を省みておこう。

「家庭」という理念が「サラリーマン以外

の都市生活者の暮らし、そしておそらくいつしか農山漁村の生活にも、一方的に覆い被さつしていくこと」について、重信は言う。

それは実は、見方を変えると、限られた階層の文化が、多様な背景と条件を背負つた暮らしを均質化していく特権的な力を与えられることを意味しています。当時の童話という言説の広がりを批判した柳田は、そのことにも異議を唱えていたことになるのではないかと考えられます。

さほど目新しい指摘には感じないかもしれない。だが、この内容を「昔話が失われゆく」という決まり文句でしか捉えられないままな

◇

車に乗って採訪に行く身ぶりのもたらす昂揚感が、団炉裏端の「逆」特権化に対する検証を怠らせてきたようにも思われてくる。

そして、電波媒体による極端な均質化の問題がある。本書でも口演童話の項でラジオに触られてはいるが、これはまだ序の口だろ

う。確かに資料の収集からして難しい問題である。しかし、ラジオと〈お話〉の問題、それは先にも触れたように浪花節の問題と重な

りながら、重要な問い合わせとなるはずだ。ここで私なりに思うのは、電波媒体の画一性についての誤認が、自身の立脚する生活を見失わせる一因だったということだ。「昔はラジオもテレビも無かつたから」という言葉に安心して寄りかかり、かつての団炉裏端を思つた。「家庭」において父親の後ろにあるテレビは、採訪先でもヨコザの後ろにあつた。テレビが電源のために背中に壁を必要とし、前を横切られるのを嫌つただけだとも言えるのだが。ラジオの届ける内容が共通であつたとしても、それを聞く体験が一様ではなかつたことくらいは頭に入れておきたい。

重信は終章において、「団欒」と〈お話〉の窮地に、口承文芸研究は追い込まれかねない。フィールドワークの身体から言えば、汽